
鬼の女～血の娘～

獅兎羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鬼の女～血の娘～

【ISBN】

978072

【作者名】

獅鬼羅

【あらすじ】

鬼兵隊の鬼の女 芦咲 露呑は真選組の隊士殺しを高杉から頼ま

れる。そこで懐かしい人たちに会う。

「お前らは恨まないのか・・・。この世界を恨まないのか。」

別れ際に言つた女性の一言に懐かしい人たちは昔の人の面影を感じ・

・・・・。

第一訓 捣みどころがない男

貴方に会えてよかったです。

私がそう思ったのはいつのことだら一か・・・。

「ねえ晋助。貴方はなにを考えているの?」

赤色の模様が入った着物を着た女性が言った。

しかし、その模様は血だった。

それも、全て自分の血ではない他の人からの返り血。

「さあーな、俺にもそれはわからねーことだ。」

冷たい声で高杉は言った。

「貴方は本当に拋みどろのない男ですね。」

女性は笑顔で言った。

「それはオメーもだろ、あらうの霞呑。」

高杉が言った。

「私はおんなよ。」

笑顔で言った。

その笑顔を見る高杉。

「そ、うだ、露呑。ひとつ頼んでいいか?」「なんでもどうぞ。」

露呑は笑顔で言った。

「真選組の隊士何人かを殺してくれないか?」

高杉が言った。

「私、一人ですか?」

露呑が聞く。

「オメーなら簡単だろ?」

冷たい声で言った。

「ええ。分かりました。」

露呑はそう言つと船から降りて行つた。

「露呑・・・いや、春櫻お前は先生を奪つたこの世界を恨まないのか?」

高杉が言った。

かなしさを含んだ声で。

第一訓 捜みどりがない男（後書き）

露呑の本名は芦咲 露呑です。

春榎の正体はこれから分かりますよ。

感想お願いします

第一訓 隊士殺し（前書き）

残酷表現あります。
苦手な方はお控えください。

第一訓 隊士殺し

「邪魔するぜ。」

真選組の屯所にはなぜか銀時と神楽、新八が居た。

「で、依頼つづーのはなんだ?」

銀時が言った。

「それはな・・・『ドーン』・・・なんだ?」

土方の声を大きな音が遮った。

「副長、大変です。攘夷浪士が攻めてきました。」

「なに!?」

土方が声を上げた。

土方は刀をとり、外へ走り出した。

その後を万事屋組が追いかけた。

「あらら、真選組ともあろうに弱いのですね。」

土方たちが外へ出るとそこには一人の女性が居た。
女性の着物は血に染まり、頬にも返り血が付いている。
その女性の前には倒れている真選組の隊士が居た。
そして、近くには山崎が刀を構えている。

「山崎!...」

土方が叫んだときにはもう遅く、女性は刀を振り下ろした。

ドーン。

「ぐつ・・・。」

「だ、旦那・・・。」

女性の刀は銀時が止めていた。

「あらり、なかなかやるのね。白夜叉。」

女性が言った。

「お前なぜそれを？そのことを知つてんのは数すくねーぞ。」

銀時が驚いて行つた。

「晋助から聞きました。」

女性が言った。

「お前・・・何もんだ？」

土方が言った。

「私は芦咲 露呑の申します。鬼兵隊の總統補佐ですわ。」

露呑が言った。

「總統補佐だと・・・？」

土方が言った。

「はい。晋助に一番近い幹部ですわ。」

そのことに驚きを隠せない土方。

「今回晋助からの真選組の隊士殺しをしろと言われたので参上いたしました。」

「隊士殺しだと！？」

土方が声を上げた。

露呑は笑うだけだった。

「お前俺と会つたことがあるか？」

銀時が言った。

「私は知りませんが、晋助は俺のなじみだと。」

露呑が言った。

「では、私はお暇をさせてもらいますわ。」

露呑はそう言い、去つて行つた。

私は嘘をついている・・・。

銀時。

貴方に会えて嬉しいのに・・・。

嬉しくてたまらないのに。

私の・・・初恋の人。

第一訓 隊士殺し（後書き）

どうでしたか？

感想をお願いします。

第三訓 初恋の相手（前書き）

この話で・・・銀時がぶつ壊れます。
銀時ファンの方、見ない方がいいです。
ショックを受けます・・・。

第三訓 初恋の相手

「お前、もう少し頑張り……。」

銀時はそう叫び、露呑のあとを追つた。

露呑は塀に向いて肩を震わせていた。

「露呑だっけ？」

不意に声をかけられて、露呑が振り返る。
その目は赤かった。

「あら、来たのですか？ 白夜叉。」

露呑が言った。

「オメー！」そ何やつてゐ、『んなど』泣いてよ。』

銀時が言った。

「泣いてなどこませんわよ。』

露呑が言った。

「強がりは昔から変わらねえーな。』

銀時が言った。

その声に露呑は肩を落とした。

「はあー、気づいたの？」

「当たり前だろ？」

そんな一人の様子を電柱の影から土方、沖田、神楽、新八が見ている。

「あの二人知り合いぽいね。」

「そうですねイ。」

「あんな美しい顔して人を斬るなんてな。」

4人はそんな会話をしている。

「お前、髪切つたんだな。」

「晋助が短いほうが似合つて。」

露呑は笑顔で言った。

「なあ、春櫻。」

「その名前で呼んでくれるんだ。」

さつきよつさらに笑顔で言った。

「なんで總統補佐なんかに？」

銀時が聞いた。

「不思議じゃないでしょ？ 戦時中だつて鬼兵隊の副官だつたから。
「さうだけどよ・・・。」

銀時が少しか小さな声で言った。

「もしかして心配なの？」

露呑がからかいつひて言った。

「んなことない……」

銀時が言った。

それを見てクスクス笑う。

「ジラは元氣にしてる?」

「ああ。」

銀時が言った。

「やつなんだ。また会いたいな。」

露呑が懐かしそひて言った。

「やつと会える?」

あつわつひて銀時。

「やうね。指名手配なのにあちこちに面をうだもん。」

露呑が言った。

「高杉も変わらないだろ。」

聞きなれた声がした。

「ジラー?」

銀時が驚いた声を出す。
沖田と土方が身構える。

「春櫻も一緒に?」

「あら一瞬で分かった?」

露呑が聞く。

「当たり前だろ・・・。村塾のマドンナだったからな。」「やめてよ。そんな言い方。」

露呑が笑う。

「じゃあ俺行くわ。」

ジラはそう言い、去つて行つた。

「晋助も変わりないか・・・。」

露呑はそう咳き、クスッと笑つた。

「昨日も散歩に言つて怪我して帰つてきたんだよ。」

露呑が言つた。

「あいつは本当に変わらないな。」

銀時が言った。

「変わったよ……だつて昔はあんなんじやなかつたじやん。」

露呑が言った。

銀時も曇つた顔を見せた。

露呑が聞いた。

「あーな。それは、高杉の考えことだろ?」「そうだね……。」

露呑が言った。

「銀ちゃんなんか幸せそうネ。」

神楽が言った。

「銀さんがあんな顔するの見たことないです。」

新八も言った。

「私、もう帰らなきや。晋助に怒られる。」

露呑がさう言った。

「春櫻。お前は露呑として生きてくのか?」

「ううん。ジラや晋助、銀時たちと一緒に一人きりの時は春檜に寝るよ。
その方が私もいいもん。」

露呑が言った。

「そうか。」

銀時が言った。

そして、何か悩んだ後言つ。

「春檜・・・。顔貸して・・・？」

「いいよ。」

露呑が笑顔で言つた。

その様子を電柱の影で声をひそめてみる。

「本当にか？」

「うん。」

すると、銀時は露呑の体を引き寄せて唇に唇を重ねた。
それに露呑は抵抗しないで身を預けた。
その様子をあぜんと見る新ハたち。

「あれってキスですよねイ。」

沖田がぽかんと言つ。

「ああ・・・。」

土方も呆然としている。

「春榎…………会えてうれしいよ…………」

銀時が幸せそうな笑顔で言った。

私も嬉しい！銀時

露呑はそう言い、銀時に抱きついた。

銀さんであんなことできるんですね・・・

新ハガキした

「銀時……あつがとう。」

銀時はそう言い、露呑を放した。
そして、露呑は背を向け歩き出した。
その後すぐ振り返り一言告げた。

「ねえ、銀時。お前らは限まないのか・・・。この世界を限まないのか。」

そう言い、去つて行つた。

「恨んでるよ、春櫻。お前と高杉を裏の世界へ連れ込んだこの世界を・・・。先生を奪つたこの世界を・・・。」

銀時は静かな声で言った。

誰のも聞こえないほど小さな声で・・・。

「で、お前らはみるだけか？」

銀時に不意に言われ、新ハたちは電柱の影から姿を現した。

「銀ちゃん。あの人斬り女。知り合いアルカ？」

神楽が聞いた。

「あいつは人斬りじゃねえーよ。ま、斬っちゃつたけど・・・。」

銀時が言った。

「どういふ意味だ？ つーか真選組の隊士を殺そうとしたんだよ。」

土方が怒りを含んだ声で言った。

「あいつは高杉の頼みなら何でも聞くって言いたいんですかイ？」

沖田が言った。

「半分正解。でも全部ってわけじゃねえーよ。あいつにひとつでは晋助は兄貴的な存在だから逆らいつときは逆らいつや。」

銀時が言った。

「あいつとはどんな関係だ？ あんなラブラブして・・・。」

土方が聞く。

「初恋の相手だよ……。露呑は……。俺の初恋の相手なんだよ。」

「初恋……。ならなんであるまでイチャつける?」

土方が聞く。

「両想いなんだよ、いまだにな。俺は今も好きだ……。露呑のことが……。」

銀時が言った。

「せうか……。だがあの女は鬼兵隊。しかもいいとい身分だ。指名手配されんのは時間の問題だぞ。」

土方が言った。

「それはあいつも分かつてるだろ……。それでも高杉のもとで居たいんだよ。それがあいつだよ。」

銀時が言った。

「じゃ、けーるぞ。新八、神楽。」

そして、そう言い家へと歩いて行つた。

銀時は変わつてない……。

私の大好きな銀時だ……。

今も恋の相手だ・・・。

ねえ、晋助。

昔に戻れるかな?

第三訓 初恋の相手（後書き）

どうでしたか？

銀さんが・・・て自分で思いました・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9807z/>

鬼の女～血の娘～

2011年12月30日22時46分発行